

Willと Be Going Toの訳語をめぐって： 「…するつもり」は will の意味を適切に反映しているか*

佐 藤 健 児

1. はじめに

英語の未来表現としての will と be going to の意味的な相違を論じた研究は枚挙に暇がない。その一方で、両者の訳語の問題を扱った研究は皆無に等しい。とりわけ、「意志未来」用法の will と be going to に関しては、両者に本質的な意味の違いが存在するにもかかわらず、一部の英和辞典や多くの学習参考書において、「…するつもり {だ／である}」（以下、単に「…するつもり」と表記）という同一の訳語が採用されてきた。以下に示すのは、『ジーニアス英和辞典 第6版』（2023）からの引用である（引用内の下線は筆者による。以下、同じ）。

- (1) a. [申し出・脅迫・約束・決定など] [**will** do] …するつもりである
 《◆話し手・主語の強い意志から弱い意志までを表す。意志の働き方や文脈に応じて種々の意味で使う》∥ I'll text you as soon as I arrive in Hong Kong. 香港に着いたらすぐメールするよ / I *will* never forgive him. 彼のことは絶対許さない / “Do you want some tea or coffee?” “I'll have tea, please.” 「紅茶かコーヒーはどうですか」「紅茶をお願いします」《◆ will はその場でなされた決心を表す。be going to は前もってなされた決心を表すのでここでは不可》。

（『ジーニアス英和辞典 第6版』 s.v. WILL）

- b. [主語の意図（意志未来の will に類似）] 〈人が〉（すぐに・近いうちに）…
 するつもりである || *I'm going to work harder this year.* 今年は
 もっと一生懸命に働くよ 《◆主語と話し手が一致している場合、話し手
 自身の意図を表す》 / “*Tom is going to open up his own shop.*”
 “No kidding? Your own shop, Tom?” “Yes.” 「トムは自分の店を開く
つもりなのよ」「本当に？ トム、あなた自身が経営するってこと？」
 「そうなんだ」 《◆主語と話し手が一致していない場合、主語の意図に
 対する話し手の確信を表す》。 （『ジーニアス英和辞典 第6版』 s.v. GO）

will と be going to に本質的な意味の違いが存在するとすれば、両者の意味は、当然、異なる訳語によって表現されるべきものである。一部の英和辞典や多くの学習参考書において採用されている「…するつもり」という訳語は、はたして、「意志未来」用法の will と be going to の両方の意味を適切に反映しているのだろうか。もし、そうでないとすれば、will と be going to の意味は、それぞれ、どのような日本語表現（訳語）に対応しているのだろうか。

本稿では、主語が一人称の場合の「意志未来」用法の will と be going to に的を絞って、両者の意味を適切に反映する訳語を探ってみたい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2節で、一連のジーニアス関連の英和辞典、ならびに、学習参考書（総合英語の類）における「意志未来」用法の will と be going to の訳語の扱いを概観し、その問題点を指摘する。次に、3節で、will と be going to の意味特徴（の違い）を確認し、続く4節で、「…するつもり」という訳語が will の訳語としては適切ではないことを指摘する。さらに、5節では、will の意味は日本語の「…する（ことにする）」、あるいは、「…しよう」という表現に対応していることを主張する。6節はまとめである。なお、本稿の考察の対象は「意志未来」用法の will と be going to であるが、「単純未来」用法と「意志未来」用法は本質的な部分で通底しているため、「単純未来」用法の will と be going to についても、適宜、触れることにする。

2. 『ジーニアス英和辞典』 および学習参考書における will と be going to の訳語の扱いとその問題点

前節で『ジーニアス英和辞典 第6版』（2023）の記述を取り上げたが、will と be going to の両者に対して「…するつもり」という同一の訳語を採用している英和辞典は同書だけではない。一連のジーニアス関連の英和辞典においても、これとほぼ同様の扱いが確認される。次の(2)は2000年以降に出版されたジーニアス関連の英和辞典における will と be going to の訳語をまとめたものである。

(2)

	will の訳語	be going to の訳語
『ジーニアス英和辞典 第6版』（2023）	…する <u>つもり</u> である	〈人が〉（すぐに・近いうちに） …する <u>つもり</u> である
『アクシスジーニアス英和辞典』（2019）	…する <u>つもり</u> である	〈人が〉（すぐに・近いうちに） …する <u>つもり</u> である
『ベーシックジーニアス英和辞典 第2版』（2017）	…する <u>つもり</u> である, …する	…する <u>つもり</u> である
『プラクティカルジーニアス英和辞典』（2004）	…する <u>つもり</u> である, …します	〈人が〉（すぐに・近いうちに） …する <u>つもり</u> である, しようと思っている
『ジーニアス英和大辞典』（2001）	…する <u>つもり</u> である, …します（よ）	〈人が〉（すぐに・近いうちに） …する <u>つもり</u> である, しようと思っている

表1 2000年以降のジーニアス関連の英和辞典における will と be going to の訳語

学習参考書においても状況はほぼ同じである。次の(3)は『ジーニアス総合英語 第2版』（2022）からの引用であるが、ここでも will と be going to の両者に対して「…するつもり」という同一の訳語が用いられている。ここでは、特に、will が「話し手（一人称）のその場で決めた意志」を表すと説明されている点に注意されたい（(1a)の2つめの下線部も参照）。

- (3) a. **I'll** text you as soon as I arrive in Hong Kong. 香港に着いたらすぐメールするよ。

will は、「～するつもりだ」という話し手（一人称）の「その場で決めた意志」を表す。 (『ジーニアス総合英語 第2版』(2022: 137))

- b. **I'm going to study** harder this year. 今年はもっと一生懸命勉強するつもりです。

be going to は「～するつもりだ」という意志未来の意味を表し、近い将来にそうするつもりであることを述べる場合に使う。

(『ジーニアス総合英語 第2版』(2022: 86))

このほか、管見の限りでは、『アースライズ総合英語』(2021: 63ff.), 『ビッグ・ディッパー高校英語』(2021: 74ff.), 『ラーナーズ高校英語 新訂七版』(2017: 68ff.), 『デュアルスコープ総合英語 新訂版』(2016: 77f.), 『総合英語 able New Edition』(2014: 85f., 132), 『基礎からの新々総合英語』(2013: 67ff.) などにおいて, will と be going to の両者に対して(括弧の有無の違いはあるものの)「…するつもり」という同一の訳語が用いられている¹。(4)はそのまとめである。

(4)

	will の訳語	be going to の訳語
『ジーニアス総合英語 第2版』(2022)	～する <u>つもりだ</u>	～する <u>つもりだ</u>
『アースライズ総合英語』 (2021)	～する (<u>つもりだ</u>) ※ p.112では, 「～する」, 「～するつもりだ」	～する <u>つもりだ</u>
『ビッグ・ディッパー高校英語』 (2021)	～する <u>つもりだ</u>	～する <u>つもりだ</u>
『ラーナーズ高校英語 新訂七版』(2017)	～する <u>つもりだ</u>	～する <u>つもりだ</u>
『デュアルスコープ総合英語 新訂版』(2016)	～する <u>つもりだ</u> , ～します	～する <u>つもりだ</u>
『総合英語 able New Edition』 (2014)	～する (<u>つもりだ</u>)	～する <u>つもりだ</u>
『基礎からの新々総合英語』 (2013)	～する (<u>つもりだ</u>)	～する <u>つもりだ</u>

表2 学習参考書（総合英語）における will と be going to の訳語

さて、ここまで、一連のジーニアス関連の英和辞典、ならびに、学習参考書における will と be going to の訳語の扱いを概観してきたが、これらの扱いには、少なくとも、次の2つの問題点が存在する。

1つは、冒頭でも触れたように、本質的に意味が異なる will と be going to の両者に対して、同一の訳語が採用されているという点である。もっとも、(1b)や(2)では、be going to の訳語（「…するつもり」）の前に「(すぐに・近いうちに)」が添えられており、そこに be going to の意味特徴のひとつである「近接性 (Immediacy)」を見てとることができる（次節を参照）。しかし、近接性の有無は、will と be going to の本質的な意味の違いではない。同じことは、(3b)の説明（「近い将来にそうするつもりであることを述べる場合に使う」）にも当てはまる。

もう1つの、より根本的な問題は、「…するつもり」という訳語は will の意味を適切に反映した訳語ではないという点である。この点を主張する前に、will と be going to の意味特徴（の違い）について確認しておこう。

3. will と be going to の意味特徴

will と be going to の訳語の問題を考えるにあたっては、両者の意味特徴の違いを明確にしておく必要がある。訳語にはそれぞれの表現の意味特徴が反映されるからである。will と be going to の意味特徴の違いをめぐっては、すでに多くの研究がなされ、重要な成果が累積されてきた。最近では、吉良 (2018: 145) が両者の意味特徴の違いを以下のようにまとめている。

(5)

意味特徴	WILL		BE GOING TO	
	未来指向性 (Future orientation)		現在・過去指向性 (Present-Past orientation)	
	(i) 単純未来	(ii) 意志未来	(i) 単純未来	(ii) 意志未来
↑ ↓	- 単なる未来の予測 - 条件設定された予測 (Contingency)	発話時に生じた意志	- 兆候に基づく未来の予測 (自己完結性・不可避性) (Self-containedness/Inevitability) - 近接性 (Immediacy)	前々から考えていた意図

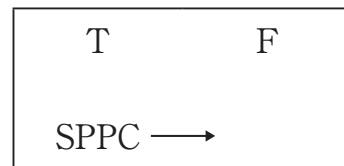
表3 吉良 (2018) における will と be going to の意味特徴²

以下では、上の表を援用しつつ、will と be going to の意味特徴の違いについて、私見を交えながら説明していくが、その前に、両者に見る「話者の視点」の違いについて触れておきたい。ここで言う「話者の視点」とは、Close (1981³: 84ff.) の言う「話者の主要な関心点 (the speaker's point of primary concern: SPPC)」を指す。Close (1981³: 99f.) によれば、will の場合、SPPC は「未来の出来事 (future event: F)」にある。一方、be going to の場合には、SPPC は「発話時 (time of utterance: T)」にあり、話者の注意は F に向けられている (次図を参照)。

(6) a. will の SPPC



b. be going to の SPPC

(a-b: Close (1981³: 99))

このことは、例えば、次の例において、

(7) a. Mr T. **will** leave tomorrow.b. Mr T. **is going to** leave tomorrow.(a-b: Close (1981³: 99f.))

will が用いられた(7 a)では、話者の主要な関心は T 氏の(明日の)出発そのものにあり、be going to が用いられた(7 b)では、その関心は T 氏の出発へとつながる現在の要因(意図や兆候)にあることを意味する(Cf. Close (1981³: 100))。will と be going to に SPPC の違いが見られるのは、両者の本質的な意味特徴の違いが発話時よりも前の状況(意図や兆候)の有無にあるためであろう。その証拠に、be going to の場合と同様に、現在進行形や単純現在形、be to の「未来」用法の場合にも、話者の主要な関心は現在の要因に注がれる(Cf. Close (1981³: 99f.))。これらの「未来」用法にも、発話時以前の状況(約束・手配や予定・計画など)が含まれるからである³。

(8) Mr T. { **is leaving** / **leaves** / **is to leave** } tomorrow.(Close (1981³: 100))

be going to は、現在とのつながりが強いという意味において、「現在指向的(present-oriented)」であり、will は、現在とのつながりが弱いという意味において、「未来指向的(future-oriented)」である(Cf. McIntosh (1966: 306))。will と be going to に見る指向性(orientation)の対立は、発話時を軸として、単純

過去形と現在完了形に見る指向性の対立と鏡像 (mirror image) 関係をなしている (Cf. Palmer (1990²: 144))⁴。

以上の「話者の視点」(「指向性」)の違いを踏まえた上で、表3における will と be going to の (i)「単純未来」用法と (ii)「意志未来」用法について、順を追って説明してみよう。

はじめに、will の「単純未来」用法について見てみよう。「単純未来」用法とは、未来の状況に対する話者の予測を表す用法のことである。ただし、ひと口に「単純未来」と言っても、次の(9)と(10)では、その中身が異なる。

(9) I **will** be seventeen next birthday. (次の誕生日に17歳になります)

(10) a. You'**ll** be sorry for this later. (後でこのことを後悔するでしょう)

b. Don't worry about that tiny stain; it **won't** (= will not) show.

(そんな小さなシミを気にすることはないわ。目立たないでしょう)

c. This book **will** come out in paperback before long.

(この本は間もなくペーパーバックで出るでしょう) (以上、江川 (1991³: 214))

(9)の will は「時の助動詞」または「時制の助動詞」と呼ばれる will である (Cf. 吉良 (2018: 146ff.))。訳語に断定表現(「…になります」)が用いられていることからわかるとおり、ここでの will には、話者の認識的な判断 (= 推量) は含まれていない (Cf. 吉良 (2018: 146ff.))。I **was** fifteen (then). の **was** や I **am** sixteen (now). の **am** が、それぞれ、[I-BE-fifteen] や [I-BE-sixteen] という状況を過去時 (then) や現在時 (now) に位置づけるのと同様に、(9)の will は [I-BE-seventeen] という状況を未来時 (next birthday) に位置づける働きをしている (Cf. 片岡 (2010: 150f.))。一方、(10)の will は話者の認識的な判断を伴う「認識的法助動詞」としての will である (Cf. 吉良 (2018: 146ff.))。(9)の will とは異なり、(10)の will が表しているのは、話者の推量である。このことは、(10)の各例の訳語に推量の助動詞(「…でしょう」)が用いられていることから支持される。なお、(10)において、主語に二人称や三人称が用いら

れている点は注目に値する。話者自身の事柄とは異なり、話者以外の事柄に対しては、その事柄が確実に起こることを知らない限り、推量が働くのがふつうだからである。

ところで、「認識的法助動詞」としての *will* は話者の認識的な判断 (= 推量) を表すが、その判断を支える根拠は話者の知識や経験であるように思われる。次の江川 (1991³: 222) の(11b)の例に対する(12)の下線部の記述や Thomson and Martinet (1986⁴: 187) の(13)の記述はこの主張の妥当性を裏書きするものである。

(11) a. He ***is going to*** get better. ([じきに] よくなるだろう)

b. He ***will*** get better. ([そのうちに] よくなるだろう)

(12) a) [= (11a)] は「熱が下がったから / 食欲が出たから」というような徴候があることを含意するのに対して、b) [= (11b)] は例えば「医者がい
いいから / 手当がいいから」というような気持ちを含む。

(以上、江川 (1991³: 222))

(13) ... *The lift will break down* implies that this will happen some time in the future (perhaps because we always overload our lifts, perhaps because it is an XYZ Company lift and they don't last).

(Thomson and Martinet (1986⁴: 187))

このように考えると、次の(14)に見るように、*will* が、しばしば、条件の *if* 節や時の *when* 節を伴うとされる理由も自ずと説明される (表3中の「条件設定された予測 (Contingency)」)。

(14) a. You'***ll*** never play well if you don't practice more.

(もっと練習をしないと、絶対に上達しないだろう)

b. He'***ll*** phone me when he gets there.

(向こうに着いたら、彼は私に電話をしてくるだろう) (a-b: 江川 (1991³: 214))

すなわち、それは、will が表す推量が話者の知識や経験に基づく推量であるため、話者と聴者の間でその根拠が共有されているか、場面から明らかでない限りは、未来の状況が生じる理由も時も条件も聴者には不明なためである。実際に、(14)から if 節や when 節を取り除いた次の(15)の日本語訳は、どこか省略的で不完全に感じられる。

- (15) a. You'**ll** never play well. (絶対に上達しないだろう)
 b. He'**ll** phone me. (彼は私に電話をしてくるだろう)

次に、「単純未来」用法の中の「認識的法助動詞」としての be going to について見てみよう。表3に見るように、「認識的法助動詞」としての be going to は「兆候に基づく未来の予測」を表す。以下の(16)では、英文中の下線部によって、兆候の存在が示されている点に注意されたい。また、各例の訳語に用いられている「…しそうだ」も「具体的な兆候に基づく判断」を表す表現形式である (Cf. 庵 (2012²: 172))。

- (16) a. The sky is clouded over; I'm afraid it's **going to** rain.
 (空がすっかり曇っている。どうも雨になりそうだ)
 b. Look out! The milk **is going to** boil over.
 (ほら、牛乳が吹きこぼれそうだよ)
 c. I feel uneasy; I think something **is going to** happen soon.
 (何だか不安だ。じきに何かが起こりそうだ) (a-c: 江川 (1991³: 220))

「認識的法助動詞」としての be going to が発話時における兆候の存在を含意することは、その兆候の存在を否定した次の(17)の容認度が低くなることから証明される。

- (17) ?She's **going to** have twins, but she isn't pregnant yet.

(Nicolle (1998: 230))

(?彼女は「大きなお腹をしていて、まるで」双子が生まれそうです。でも、まだ妊娠していません (吉良訳 (2018: 148)))

さて、be going to が発話時における兆候の存在を含意するとすれば、be going to には、will のような if 節や when 節による支えは不要である (表3中の「自己完結性 (Self-containedness)」。Be going to の場合には、兆候という形で推量の根拠が示されており、その兆候がそのまま推移していけば、近い将来に未来の状況が生起することも含意されているからである。この「自己完結性」は、will とは異なり、be going to は未来時を指示する条件文の帰結節には現れにくいという言語事実からも支持される⁵。

- (18) a. He'**ll** sell it if you ask him. (normal)

b. He's **going to** sell it if you ask him. (rare) (a-b: Allen (1975⁴: 114))

will の「条件性」と be going to の「自己完結性・不可避性」に関して、次の例を比較してみよう。

- (19) a. Don't sit on that rock. It'**ll** fall.

b. Don't sit on that rock. It's **going to** fall. (a-b: Palmer (1974: 164))

Palmer (1974: 164) によれば、will が用いられた(19a)は、「岩の上に座れば、岩は崩れ落ちるだろう (it will fall if you sit on it)」と解釈される。一方、be going to が用いられた(19b)は、「岩の上に座る、座らないにかかわらず、どのみち岩は落ちそうだ (it is going to fall anyway, whether you sit on it or not)」の意味である。(19a)には、岩の上に座らなければ岩は崩れ落ちることはないという含みがあるが、(19b)には、そのような含みはなく、岩崩れは避けられない。

このようなことから、次の(20)のように、条件性を差し挟むことのできない差し迫った状況では、「不可避性」を表す *be going to* のみが適格と判断されることが理解されよう。

- (20) Hang on! We { *?’ll* / *’re going to* } crash! (Larkin (1976: 395))

次に、「意志未来」用法の *will* と *be going to* について見てみよう。表3に見るように、「意志未来」用法の *will* は、「発話時に生じた意志」を表す。一方、*be going to* は、「前々から考えていた意図」を表す。次の例は両者の意味特徴の違いを示す好例である（例文中の X は息子、Y は母親とする）。

- (21) X: There’s no milk in the refrigerator. (冷蔵庫に牛乳がないよ)
 Y: { a) *I’m going to* get some today. (きょう買ってくるつもりなのよ)
 b) *I’ll* get some today. ([じゃあ] きょう買ってきましょう)
 (江川 (1991³: 222))

江川 (1991³: 222) によれば、*be going to* が用いられた(21Ya)には、「母親が牛乳のないことを知っていて、買いに行くつもりであったという含み」がある。一方、*will* が用いられた(21Yb)では、「息子に牛乳がないと言われて、母親が買いに行くつもりになったのである」という。このような意味特徴の違いから、次のような場面においては、（電話が鳴る前から自分が出るつもりであったという状況を設定しない限り）*be going to* は不自然である（Cf. 江川 (1991³: 222)）。

- (22) Telephone: ‘Rrring, Rrring’ (immediately)
 (a) *I’ll* get it.
 (b) *?I’m going to* get it. (Nicolle (1997: 375))

「意志未来」用法の *be going to* が「前々から考えていた意図」を表すことは、

さらに、以下の点からも証明される。

第1に、先の(17)と同様に、be going to を含む節に発話時以前の意図の存在を否定する節を後続させると容認度が低くなる。

(23) Would somebody chair this afternoon's session, please?

?I'm **going to** do it although I wasn't intending to. (Nicolle (1998: 230))

第2に、will とは異なり、be going to は基準時より前の状況の存在を前提とする副詞である already との共起が可能である。

(24) a. She's already **going to** buy some new shoes; she can't have the coat as well.

b. *She **will** already buy some new shoes ..., she can't have the coat as well. (a-b: Carter and McCarthy (2006: 631))

第3に、will とは異なり、be going to は過去時制の述語動詞の従属節節内に生起することができる。

(25) a. I didn't realize that you { **are going to** / ?**will** } travel by boat.

b. Did you know that Ann { **is going to** / ?**will** } get married?

(a-b: Haegeman (1989: 308))

ここでは、過去のある時点において、「気がつかなかった」(didn't realize), あるいは、「知っていたか」(Did you know) と述べて(尋ねて) いることから、その内容である従属節の状況も発話時よりも前から生じていなければならない。

なお、吉良(2018)は表3における「近接性(Immediacy)」をbe going to の「単純未来」用法にのみ認めているが、近接性の含意は「意志未来」用法にも認められるものである。Leech(2004³: 59)の指摘によれば、時間副詞類を伴わ

ない次の(26a)は、(26b)とは異なり、「すぐに (soon)」を含意する⁶。

(26) a. We're **going to** buy a house in the country.

b. We're **going to** buy a house in the country when we retire.

(a-b: Leech (2004³: 59))

以上、本節では、吉良 (2018) を援用しつつ、will と be going to の意味特徴の違いを概観した⁷。

4. 「つもり」の意味

前節で概観した will と be going to の意味特徴の違いを踏まえた上で、本節では、「…するつもり」という訳語が will の訳語としては不適切であることを指摘する。

はじめに、国語辞典における「…するつもり」の定義を確認してみよう。『広辞苑 第七版』(2018) では、「つもり (積り)」は次のように定義される⁸。

(27) つもり 【積り】

③前もって持っている考え。心ぐみ。意図。「明日行くーだ」

(『広辞苑 第七版』(2018) s.v. つもり 【積り】)

上記の記述で注目すべきは、「つもり」の定義に「前もって」という表現が用いられている点である。ここから、「…するつもり」という表現が、will とは異なり、「前々から考えていた意図」を表すことが予想される。

この予想が正しいことは、具体的には、次の2つの言語事実によって証明される。

第1に、「発話時の意志決定」を表すような場面においては、「…するつもり」を使用することはできない。このことは、(22)の言語事実と並行的である。

(28) A：雨が降りそうですよ。

B：×そうですか。じゃあ、傘を持っていくつもりです。

（庵他（2001: 235））

(29) A：来週会議がありますよ。

B：そうですか。*では、出席するつもりです。（近藤・姫野（2012: 167））

(30) *それなら、僕も行くつもりだ。（益岡・田窪（2024³: 129））

第2に、「…するつもり」は、基準時よりも前の状況の存在を前提とする副詞である「(ずっと) 前から」と共起することが可能である。このことは、(24)の言語事実と並行的である。

(31) a. 前から僕がやるつもりだった。（森山・仁田・工藤（2000: 69））

b. ずっと前から、彼と結婚するつもりでしたし、今もそのつもりです。

（森山・安達（1996: 93））

以上の2つの言語事実、[「…するつもり」が、be going toと同様に、「前々から考えていた意図」を表すことを物語るものである。この点において、「…するつもり」は「発話時に生じた意志」を表すwillとは根本的に異なっており、したがって、willの訳語としては不適切であると結論づけることができる⁹。

5. Willの訳語をめぐって

前節では、「…するつもり」が、willの訳語としては不適切であることを論じた。では、willの訳語として適切な日本語表現（訳語）とは、どのようなものであろうか。

日本語には意志を表す表現が数多く存在し、その分類も学者によって様々である。本稿では、庵他（2001: 232ff.）に従って、日本語の意志表現を次のように分類する。

- (32) a. 意向形 (「しよう」)
 b. ル形 (「する・しない」)
 c. (よ) うとする (意向形+とする), (よ) うにも～ない
 d. つもりだ, 気だ, 予定だ, ことにする

このうち, (32d)の「つもりだ」が「発話時に生じた意志」を表す will とは大きく異なることは, 前節で見たとおりである。また, 「つもりだ」に似た表現に「気だ」があるが, 「気だ」は一人称主語には用いることができないという点において, will (や be going to) とは根本的に異なる。

- (33) a. 彼は弁護士になる気だ。
 b. ×私は弁護士になる気です。 (a-b: 庵他 (2001: 237))

(32d)の「予定だ」についてはどうであろうか。庵他 (2001: 236) は, 「つもりだ」と「予定だ」を比較して, 「「つもりだ」が話し手の個人的な心づもりを表すのに対し, 「予定だ」は他の人と相談の上決めたことや公的な決定事項を表します」として, 次の例文を提示する。

- (34) 今度の週末にクラス全員でお花見に行く {×つもりだ／○予定だ}。
 (庵他 (2001: 236))

本稿では, 「予定だ」が表す意味は, will ではなく, むしろ, 現在進行形の未来用法に当てはまる訳語であると想定する。「予定だ」と同様, 現在進行形の未来用法も (i)「予定・計画 (plan)」や「約束・手配 (arrangement)」を含みとする未来表現であり, (ii) その「約束・手配」も「社会的に前もって取り決められたもの (something socially predetermined in the past (Leech (2004³: 62))))」と定義されるからである。Leech (2004³: 62) は, 次の(35)の2つの例を比較して, (36)のように述べているが, この記述などは上で見た「つもり

だ」と「予定だ」の違いと並行的である¹⁰。

- (35) a. *I'm **going to** take Mary out for dinner this evening.*
 b. *I'm **taking** Mary out for dinner this evening.*
- (36) An intention is part of one's present state of mind, while an arrangement is something socially predetermined in the past, regardless of how the speaker feels now. So the second sentence, but not the first, could conceivably be uttered with some reluctance by someone who now regret the arrangement. (以上, Leech (2004³: 62))

続いて、(32c)の「(よ) うとする (意向形+とする)」と「(よ) うにも～ない」について見てみよう。まず、「(よ) うにも～ない」は、次の(37)に見るように、「可能の否定の表現を伴って」(庵他 (2001: 235)) 用いられるため、will (not) の使用法とは根本的に異なる。

- (37) 約束の電話がかかってこないで、出掛けようにも出掛けられない。
 (庵他 (2001: 235))

また、「(よ) うとする (意向形+とする)」も「その行為が試みられたがまだ達成されていないことや、ある行為が行われる直前であること」(庵他 (2001: 234)) を表すため、will の意味とは相容れない (注9を参照)。

結論的に言えば、(32)のうち、will の訳語として適切な表現は次の3つである¹¹。

- (38) a. 意向形 (「しよう」)
 b. ル形 (「する・しない」)
 d. ことにする

これら3つの表現は、willと同様に、「発話時に生じた意志」を表すことが可能だからである。このことは、以下の例が適格とされることから証明される。

(39) A：雨が降りそうですよ。

B：そうですか。じゃあ、傘を {持っていきます／持っていくことに
します}。[ル形／ことにする] (Cf. (28)) (庵他 (2001: 235))

(40) A：来週会議がありますよ。

B：そうですか。では、出席します。[ル形] (Cf. (29))
(近藤・姫野 (2012: 167))

(41) それなら、僕も行く。[ル形] (Cf. (30)) (益岡・田窪 (2024³: 129))

(42) A：夕飯はすき焼きにするわ。

B：じゃあ、早く帰ることにするよ。[ことにする] (庵他 (2001: 238))

(43) 甲：どなたか、行ってくださる方はいらっしゃいませんか。

乙：私が {行く／行こう}。[ル形／意向形] (益岡・田窪 (2024³: 130))

次の例では、「前々から考えていた意図」を表す「つもり」と「発話時に生じた意志」を表す「ル形」および「意向形」の違いがよく現れている。

(44) A「君、こんどの旅行に行く？」

B「うん、行くつもり」[つもり]

A「あ、そう。君が行くなら僕も {行くよ／行こう}。[ル形／意向形]
(森山・安達 (1996: 96))

また、予想されるとおり、これら3つの表現は、いずれも、基準時よりも前の状況の存在を前提とする副詞である「(ずっと) 前から」とは共起することはできない。

(45) (ずっと) 前から傘を {×持っていきます／×持っていくことにします}。

[ル形／ことにする] (Cf. (39))

(46) * (ずっと) 前から私が {行く／行こう}。[ル形／意向形] (Cf. (43))

もちろん、これら3つの表現に違いがないわけではない。例えば、(38a)の意向形（あるいは意志形）は否定形を持たない（Cf. 吉川（1989: 147））。また、次の例に見るように、「ル形」は独り言では使えない（Cf. 森山・安達（1996: 94））。

(47) (誰もいない部屋で) 今日は、この本を読む。(不自然)

(森山・安達（1996: 98）)

しかし、このような意向形や「ル」形との相違点を除けば、(38)の3つの表現は、いずれも、willと同様に「一人称主語」で「発話時に生じた意志」を表すことが可能である。この点において、これら3つの表現（「しよう」「する」「ことにする」）はwillの訳語として適切な表現であると結論づけることができる¹²。

6. おわりに

本稿では、従来見過ごされがちであったwillとbe going toの訳語の問題を取り上げた。英和辞典や学習参考書の中には、willとbe going toの両者に対して「…するつもり」という同一の訳語を採用しているものが散見されるが、「…するつもり」は、willとは異なり、「発話時に生じた意志」を表すことができないという点において、willの訳語としては不適切である。訳語の問題は一見すると些細な問題のように思えるが、誤った訳語は誤った使用へとつながる。その意味において、個々の表現の意味に負けず劣らず重要な問題であると言える。

* 本稿は英語語法文法学会第19回英語語法文法セミナー「英語教師のための語法文法」(2023年8月7日(月), 関西学院大学大阪梅田キャンパス)において、「英語

注

- 1 語法書の類では、柏野（2010: 259）に次の記述が見られる。
- （i）will と be going to はともに意志未来と単純未来の意味を表す。意志未来とは話し手の主語の意志を表すもので、通例「…するつもり」と訳される。
- （1）I'll tell you later.
後で言うよ。
- （2）A：“What *are you going to* do?”
B：“I'm *going to* tell her the truth.”
A：「何をするつもりなの？」
B：「彼女に本当のことを言うつもりだ」（以上、柏野（2010: 259））
- 2 表中で、will の（i）単純未来に付された双方向縦矢印は、「単なる未来の予測」から「条件設定された予測」までのあいだに、will の表す予測の意味には濃淡があることを示している（吉良（2018: 145））。
- 3 現在進行形や単純現在形、be to の「未来」用法に発話時以前の状況（約束・手配や予定・計画など）が含まれることは、Declerck（2006, 2010）による括弧内のパラフレーズや説明からも支持される。
- （i）a. I'm **leaving** in a minute. (= ‘There is a present plan or arrangement for me to leave in a minute.’)
b. The train **leaves** at 7.12 tonight. (*reference to a present scheduling*)
c. The Queen **is to** leave for Canada tomorrow. (= ‘There is an official arrangement for the Queen to leave for Canada tomorrow.’)
(a,c: Declerck（2010: 274）, b: Declerck（2006: 339）)
- 4 McIntosh（1966）とは異なり、吉良（2018: 145ff.）は、be going to が表す兆候や意図が発話時よりも前から存在していることを理由に、be going to の指向性を「現在・過去指向性（Present-Past orientation）」としている。
- 5 未来時を指示する条件文の帰結節に be going to が現れる条件については、拙論（2016）を参照されたい。
- 6 ただし、拙論（2020）で指摘したように、be going to が表す「近接性（immediacy）」は、キャンセル可能な「語用論的含意」である。その証拠に、be going to は、遠い未来の状況にも言及することが可能である。
- （i）a. If Winterbottom's calculations are correct, this planet **is going to** burn itself out 200,000,000 years from now.

b. **I'm going to** do what I like when I retire. (a-b: Leech (2004³: 60))

be going to と be about to の近接性の含意の違いの詳細については、拙論 (2020) を参照されたい。

- 7 be going to が基準時よりも前に生じた兆候や意図を含意するのは、「進行形が表す状況には必ず基準時以前の状況 (= 前段階性) が認められる」(拙論 (2014: 101) からである。進行形の前段階性の詳細については、拙論 (2014, 2016) を参照されたい。
- 8 「つもり」の定義は辞典によって様々である。ここでは、発話時の意志決定を表す will との比較対照を行うため、時間的観点からの定義がなされている『広辞苑』を採用している。
- 9 「…するつもり」は be going to の訳語としては適切であるが、be going to が常に「…するつもり」と訳されるわけではない。特に、近接性が強調される場面では、「…しようと {する／している}」のほうが適切である。
 - (i) a. When I **was going to** get on the bus, someone tapped me on the shoulder.
(バスに乗ろうとしていると、だれかに肩をたたかれた)
 - b. I **was just going to** catch the bird when it got away.
(ちょうど鳥を捕まえようとしたとき、逃げてしまった)
 - [Cf. We **were going to** call on you last night, but we had visitors ourselves. (ゆうべ君の家へ行くつもりだったが、こっちにも来客があつて行けなかった)] (以上、江川 (1991³: 232))
- 10 Leech (2004³: 62) は、(36)に続けて、(35b)のような現在進行形の未来用法は「口実 (excuse)」として用いられやすいとして、次の例を挙げている。
 - (i) I'm sorry, I'd love to have a game of billiards with you, but **I'm taking** Mary out for dinner this evening.
日本語でも、次の(ii a)よりも(ii b)のほうが、相手の誘いをそつなく断ることができる (Cf. 吉良 (2018: 138f.)).
 - (ii) a. 今夜はメアリーと外で食事をするつもりなんだ。
b. 今夜はメアリーと外で外食をする予定なんだ。
- 11 (38)に関して、査読者より「…will の訳語として適切な表現を3つ提示しているが、「～になる」という表現も『ジーニアス英和辞典第6版』には記載されている。(38)には a,b,d? に「～になる」を入れる必要はないか。」との指摘をいただいた。しかし、『ジーニアス英和辞典 第6版』に示されている「…になる」は「単純未来」用法の will に付された訳語であり、かつ、正確には「…になる」は will ではなく、will に後続する原形不定詞の訳語であると考えられる。したがって、本稿では、(38)に「…になる」を含めていない。
- 12 「ことにする」と「ことになる」の意味特徴の違いは、「意志未来」用法の will と「自然の成り行き」を表す will be -ing の意味特徴の違い (意志性の有無) と並行的である。その詳細については、拙論 (2015) を参照されたい。

参考文献

- Allen, W. S. 1974⁵. *Living English Structure*. London: Longman.
- Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Close, R. A. 1981³. *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*. London: George Allen and Unwin.
- Declerck, R. (in collaboration with S. Reed and B. Cappelle). 2006. *The Grammar of the English Verb Phrase – Volume 1: The Grammar of the English Tense System*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Declerck, R. 2010. “Future Time Reference Expressed by *be to* in Present-day English,” *English Language and Linguistics*, 14.2, 271-291.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説 一改訂三版一』 東京: 金子書房.
- Haegemen, L. 1989. “Be Going To and Will: a Pragmatic Account,” *Journal of Linguistics*, 25, 291-317.
- 庵功雄・高橋信乃・中西久実子・山田敏弘. 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 東京: スリーエーネットワーク.
- 庵功雄. 2012². 『あたらしい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』 東京: スリーエーネットワーク.
- 柏野健次 (編著). 2010. 『英語語法レファレンス』 東京: 三省堂.
- 片岡宏仁. 2010. 「第14章 時制とアスペクト」 澤田治美・高見健一 (編). 『ことばの意味と使用—日英語のダイナミズム』 東京: 鳳書房.
- 吉良文孝. 2018. 『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』 (〈シリーズ〉英文法を解き明かす—現代英語の文法と語法⑤) 東京: 研究社.
- 近藤安月子・姫野伴子 (編著). 2012. 『日本語文法の論点43—「日本語らしさ」のナゾが氷解する—』 東京: 研究社.
- Larkin, D. 1976. “Some Notes on English Modals,” in J. D. McCawley (ed). *Syntax and Semantics*, 7, 387-398. New York: Academic Press.
- Leech, G. N. 2004³. *Meaning and the English Verb*. London: Routledge. [澤田治美 (注釈). 2011³. 『Meaning and the English Verb』 東京: ひつじ書房].
- 益岡隆志・田窪行則. 2024³. 『基礎日本語文法 第3版』 東京: くろしお出版.
- McIntosh, A. “Predictive Statements”, in C. E. Bazell, J. C. Catford, M. A. K. Halliday and R. H. Robins (eds). *In Memory of J. R. Firth*. 303-320. London: Longman.
- 森山卓郎. 2000. 『ここからはじまる日本語文法』 東京: ひつじ書房.
- 森山卓郎・安達太郎. 1996. 『文の述べ方』 (日本語文法セルフ・マスターシリーズ6) 東京: くろしお出版.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩. 2000. 『モダリティ』 (日本語の文法3) 東京: 岩波書店.
- Nicolle, S. 1997. “Relevance-theoretic Account of *be going to*,” *Journal of Linguistics*, 33, 355-377.

- Nicolle, S. 1998. “*Be going to* and *will* a Monosemous Account,” *English Language and Linguistics*, 2, 223-243.
- Palmer, F. R. 1974. *The English Verb*. London: Longman.
- Palmer, F. R. 1990². *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- 佐藤健児. 2014. 「進行形の「前段階」性について」 日本大学英文学会 (編) 『英文学論叢』 第62巻, 99-119.
- 佐藤健児. 2015. 「「自然の成り行き」を表す *will be -ing* 構文をめぐって—テンス, アスペクト, モダリティの観点から」 『モダリティの意味論的・語用論的研究』 モダリティ研究会, 1, 333-350.
- 佐藤健児. 2016. 「条件文の帰結節における *be going to* に関する記述的研究」 英語語法文法学会 (編) 『英語語法文法研究』 第23号, 143-159.
- 佐藤健児. 2020. 「現代英語の *be about to* に関する意味論的研究」 日本大学法学部 (編) 『桜文論叢』 第102号, 33-55.
- 吉川武時. 1989. 『日本語文法入門』 (NAFL 選書) 東京: アルク.

辞典

- 小西友七・南出康世 (編). 2001. 『ジーニアス英和大辞典』 東京: 大修館書店.
- 小西友七・東森勲 (編). 2004. 『プラクティカルジーニアス英和大辞典』 東京: 大修館書店.
- 中邑光男 (編). 2020. 『アクシスジーニアス英和辞典』 東京: 大修館書店.
- 原川博善・畠山利一 (編). 2017. 『ベーシックジーニアス英和辞典 第2版』 東京: 大修館書店.
- 南出康世・中邑光男 (編). 2023. 『ジーニアス英和辞典 第6版』 東京: 大修館書店.
- 新村出 (編). 2018. 『広辞苑 第七版』 東京: 岩波書店.

総合英語

- 赤野一郎 (監修). 2014. 『総合英語 able New Edition』 東京: 第一学習社.
- 小寺茂明 (監修). 2016. 『デュアルスコープ総合英語 新訂版』 東京: 数研出版.
- 三村浩一 (監修). 2021. 『アースライズ総合英語』 東京: 数研出版.
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次 (編). 2022². 『ジーニアス総合英語 第2版』 東京: 大修館書店.
- 高橋潔・根岸雅史 (編). 2013. 『基礎からの新々総合英語』 東京: 数研出版.
- 田中実 (監修). 2017. 『ラーナーズ高校英語 新訂七版』 東京: 数研出版.
- 田中実 (監修). 2021. 『ビッグ・ディッパー高校英語』 東京: 数研出版.